

# 宮内庁書陵部本『点取和歌部類』①所収

## 「秋二十首・冬十首」「雑二十首」和歌について

——延徳二（一四九〇）年九月九日起日後土御門天皇主催着到和歌との関係——

本山八重子

はじめに

### 一 「秋二十首・冬十首」和歌

宮内庁書陵部本『点取和歌部類』①（150―161）（以下「本点取部類」と称する）の所収歌は、外題によると文明一四（一四八二）から明応五（一四九六）年までに催された宮中歌会の詠進歌に批点が付されたもので、江戸中期に写された冊子本である。その中に、「秋二十首・冬十首」「雑二十首」の部類歌が合写されている。この二種類の部類歌の関連性や歌会の開催年時及び主催者を示す情報は「本点取和歌」には何も記載されていないが、詠進者及び点者等が明記されているので、それを手掛かりに古記録及び他の資料を参照して、この二種類の和歌部類の関係、歌会の年時及び形態を考察してみたい。

「秋二十首・冬十首」は一首二行書き、右頁は一五行書き、左頁は一六行書き。題は秋二十首（早秋・乞巧奠・萩風・萩露・秋夕・初雁・秋田・夜鹿・暁虫・山月・湖月・野月・渡月・庭月・閑霧・聞持衣・重陽宴・杜紅葉・河紅葉・九月尽）冬十首（初冬・時雨・落葉・寒草・残雪・積雪・池氷・豊明節会・冬月・湯千鳥・歳暮）である。これは「後嵯峨院初度百首」（宝治百首）の秋と冬の題に一致するのでこの組題を用いたものと考えられる。

秋冬の詠進歌の書式は次のように書写されている。各巻頭歌と巻軸を挙げておく（批点は歌の頭に「／＼」で表記する）。

#### 「秋巻頭歌」

秋二十首

早秋

重経朝臣

秋とふくかせをしらせてつゆもまた

をきあへぬ秋にちる一葉かな

目にみえてをとこそなけれ一葉ちる

梢によはき秋のはつかせ

草の葉に露のみみえて朝ほらけ

また吹あへぬ秋のはつかせ

草木にはまた音たてぬ秋風の

うすきにとをる夏ころもかな

仁和寺宮

めにみえぬ秋風よりもをとろくや

今朝ちり初る一葉なるらん

〔秋巻軸歌〕

九月盡

長月と名にのみ立て行秋の

けふをかきりにくる、程なき

式部卿宮

おしと思ふこゝろにあきのしたかはて

たか情にかけふはとまらん

うしとても詠はすてし秋もはや

けふの夕にかきる名残を

行秋の夕のかねもこゝろして

今日の一日よなかき日もかな

御製

けふのみとしたふに絶ぬ袖の露

消すはありとも秋はのこらし

〔冬巻頭歌〕

冬十首

初冬時雨

昨日はや秋をさそひて行雲の

名残かけさも又しくれぬる

名残あるきのふの秋の面かけに

あしたの空や又時雨るらん

あさもよひ昨日かくれし秋しのの

外山しくれて冬は来にけり

さためなき名にはたてとも神無月

かならずとふるはつ時雨かな

今朝は又冬の色しる木枯や

うき雲さそひ時雨きぬらん

〔冬巻軸歌〕

歳暮

いたつらに月日は雪とつもりきて

あつめぬ窓に年そくれぬる

行としの名残にかへてなへてよの

のとかなるへき春や待らん

御製

冬枯のこす糸にうつる村とりの

とまるかけなくくるとし哉

仁和寺宮

／＼春秋もかへらぬ今の名残にて  
めつらしげなくくる、年哉  
つもりゆく日数よいかにあかさりし  
はるにはちかきとしのくれ哉

僻案愚点三十八首

実隆上

御製 秋九首 冬三首

親王御方 秋六首 冬一首

式部卿宮 秋六首 冬二首

仁和寺宮 秋五首 冬二首

重経朝臣 秋二首 冬二首

二 「雑二十首」和歌

「雑二十首」和歌も「秋二十首・冬十首」同様に一首二行書き  
で、右頁は一五行書き、左頁は一六行書き。題は同じく「後嵯峨  
院初度百首」に一致していて、暁鷄・夜灯・嶺松・里竹・磯巖・  
鳴鶴・岡篠・江葦・浦舟・杣山・岸荳・山家水・山家嵐・田家雨・  
旅行・旅宿・旅泊・海眺望・寄社祝・寄日祝の組題であり、書式  
及び詠進者も共通しているので、同年時の歌会に連なる詠進歌と  
考えられる。

巻頭歌と巻軸歌を次に示す。

「巻頭歌」

雑二十首

暁鷄

鳴鳥の八こゑのかすもつもりゆく  
老のね覚に誰か聞らん  
心あれやなかきねふりの暁を  
おとろかしぬる鳥のなくねは  
告わたる夕付鳥のひとこゑに  
千里をかけて明る空かな  
いつか身の誠の夢はさめてまし  
あかつき告る鳥の八こゑも

御製

／＼定まらぬ覚も人はあるものを  
あはれ時しる鳥のこゑ哉

「巻軸歌」

寄日祝

御製

／＼明けき世のためしとも諸人の  
あふけは高き日の御影かな  
親王御方

／＼此国の外にも知かめくる日の  
光にみえてくもりなき代は  
てらす日のめくみをしらぬためしこそ  
君かおさむる時にみえけれ  
四方八すみくもりなき代と出る日の

かけをそあふく天のかく山  
限なき君か千とせも久かたの  
空にしられてめくる日のかげ

僻案愚点二十七首

実隆上

御製 十首

親王御方 三首

式部卿宮 六首

仁和寺宮 三首

重経朝臣 五首

### 三 「本点取部類」に関連する古記録

「本点取部類」の詠進者は、御製（後土御門天皇）、勝仁親王、式部卿宮（伏見宮邦高親王）、仁和寺宮（道永法親王）、重経朝臣（庭田）の五人である。批点が付された和歌には作者が表記されているので、和歌の配列は身分に関係なく順不同であることが分かる。巻軸歌「寄日祝」は一首目と二首目の歌に批点が付されているので、配列は御製、勝仁親王の歌の順序であり、以下無記名ではあるが、式部卿宮、仁和寺宮、重経朝臣と身分に準じて歌が並んでいた可能性がある。

歌題は秋・冬・雑とも「後嵯峨院初度百首」に一致し、春・夏・恋の歌の存在は確認できないが、百首和歌の組題による宮中歌会の詠進歌の一部と類推される。

さらに、和歌の配列が身分とは無関係に順不同であること、巻

軸歌（雑・寄日祝）の配列が身分に準ずると推察されることなどを考慮すると、着到和歌の様相を呈しているので、原本から秋冬及び雑の歌を抜粋して、三条西実隆に批点及び評語を付けてもらった写本とも想像される。

そこで、文明一四（一四八二）から明応五（一四九六）年までに催された禁中着到和歌の記録を調べたところ、『大日本史料』延徳二（一四九〇）年九月九日の記事をはじめ、『御湯殿上日記』『実隆公記』に次のような記事が見出された。

九月九日

九月二十一日

十月十一日

十月十二日

十一月十六日

十二月十九日

着到百首和歌を始め、伏見宮邦高親王をして、詠進せしめらる、尋で、三条西実隆をして批点せしめらる、『大日本史料』

御日歌もあそはしおかれて、御たんしやくにてあそはす、御人すへもこの分御申あり、

『御湯殿上日記』

自禁裏百日和歌春夏「五人詠歌也」一卷被下之、自重陽日課宮々等御詠也、合点可進上之由也、先為拜見留申之由申入了、今夜守庚申、及半更加校彼一卷大略電覽、『実隆公記』

昨日一卷合点三十七首今朝進上之了、（同記）

今日禁裏御百首秋冬部合点三十八首進上之了、（同記）

今日禁裏著到恋部「百首」、合点三十三首

進上之(同記)

十二月二十三日 今日著到一卷「雑部」合点進上之、(同記)

上記の記事から分かることは、以下の通りである。

①延徳二(一四九〇)年九月九日から禁裏着到和歌が催行され、参加者は五人で、天皇、式部卿宮邦高親王、宮々等で構成された。

②料紙は短冊であった。

③十月十一日に五人の春・夏の歌が書かれた一卷に批点を付けるように実隆に依頼された。

記事には題に関する記載はないが、「後嵯峨院初度百首」の歌題を用いていたものと仮定すると、春・夏の部の着到が終了するのは十月八日であるので、短冊から巻物に清書する時間などを考慮すると十一日に実隆に届けられたのは自然な時間的経過と思われる。翌十二日に三十七首に批点が付されて進上されている。

④実隆は、秋・冬の着到歌三十八首に批点を付して十一月十六日に進上している。

秋・冬の着到歌の終了日は十一月九日である。

⑤十二月十九日に恋の着到歌百首(二十首×五人)に三十三首の批点を付して進上している。

恋部の終了日は十一月二十九日である。終了日と進上日に二十日ちかくの間があるのは、後土御門天皇の姉・安禪寺宮(芳苑惠春)の不例が原因であろうか。

『実隆公記』十一月二十九日の記事に安禪寺宮が危篤状態に

陥ったことが記され、十二月十一日に逝去、同月十五日から十七日までの三日間の廃朝宣下が下されたことが載っている。で、清書作業などができる状態ではなかったと推察される。

⑥十二月二十三日に雑部一卷に批点を付して進上しているが、残念ながら批点の数は示されていない。

満願日は十二月二十日であるから、急ぎの日程のように思われるが矛盾はない。

「本点取和歌」の参加者は後土御門天皇及び宮々として勝仁親王及び、式部卿宮邦高親王、仁和寺宮道永法親王の兄弟が挙げられ、廷臣は庭田重経一人であるが、宮々の生母は庭田家出身であること、特に勝仁親王と重経朝臣は従兄弟という近い血縁関係にあることから、高貴な身分の詠進者の末席に雑用係のような形で重経朝臣が連なっても違和感はなく、人数も構成員も古記録の記事に矛盾しないように思える。

秋・冬の着到歌を一卷にして実隆に批点を頼んだ結果、「本点取和歌」の形で残されたものと考えられ、批点の三十八首は本着和歌の記事と一致する。

雑部の着到歌も一卷として実隆に批点を依頼しているので、雑の点取和歌の形で残されたものと思われる。批点の数が『実隆公記』には示されていないのが残念である。

三十八首の批点が付された春・夏の着到歌及び三十三首の批点が付された恋の着到歌は確認されていないが、『実隆公記』の記事から当時は存在していたことが知られよう。

まとめ

延徳二年九月九日起日後土御門天皇主催の着到和歌は短冊で詠進されたことは古記録から知られるが、その原本も写本も確認されていない。

批点を請けるために和歌を「春・夏」「秋・冬」「恋」「雑」と分類して清書した各巻物を点者に提出していること、詠進者の構成、点者が実隆であることなどの古記録の記事から「本点取和歌」の部類歌がこの時の着到和歌の一部であることに無理がないと考えるが、断定するにはさらなる資料の出現を俟ちたい。

他の写本を次に示す。

①書陵部本『御点取部類「後小松―正親町」』（153―219）所収

「秋二十首冬十首」「雑部二十首」

②書陵部本『御点取和歌「堯空」』（266―226）所収「秋二十首冬十首」「雑部二十首」

③書陵部本『五十首続歌等「文明永正」』（266―551）所収「秋二十首冬十首」

三本とも冊子本の形態で、一首一行書き、批点が付された歌のみに作者名が記されている。

紙面の都合上、翻刻は書陵部本『御点取和歌「堯空」』所収の当該和歌により、合点は和歌の冒頭に「＼」記号で表記する。「本

点取和歌」との校異は各語句の右に（ ）で括って表記する。

秋二十首

早秋

秋と吹かせをしらせて露も又置あへぬ枝に散一葉かな 重経朝臣

目にみえて音こそなけれ一葉散梢によはき秋の初かせ

草の葉に露のみ見えて朝ほらけまた吹あへぬ秋の初風

草木にそまた音たてぬ秋かせのうすきにとをる夏衣哉

目にみえぬ秋風よりやおとろくもけさちりそむる一は成るらん

（仁和寺宮）

乞巧奠

玉敷の庭に置くふことの緒の絶ぬ手向を星はうつらし

名に高き雲の庭の灯も光そへたるほしあひのそら

うたふよの星にはあらて織女の手向の庭火影も更行 親王御方

手向置雲の庭の琴のをに分てやほしも心ひくらん

星まつる雲の庭に置くことの秋のしらへや空にしるらん

萩風

萩のは、夜半の枕にをきすへて夢路とをさぬ秋風そふく

うき物とかせの音きく萩のはに見もせぬ露も心置らん

いかにして露は置らん秋かせの絶ぬやとりの庭のをき原

軒ちかき萩の上葉をわたるよや夢路に高き秋かせのこゑ

草も木も音やはあらぬ秋風のなと萩はかり名には立らん 御製

萩露

色も猶光りこそそへ朝露の玉にもすれる秋萩の花

諸人の行来の岡の萩か花衣にすれる露のいろかな

おなしの、草の袂に置露も真萩にすれる色をみせなん

名にしるき花の錦を折かけて露は玉散萩の戸の秋

みやきの、木の下露も咲萩の花の上より置くやそむらん

秋夕

わひしさもことはり過て身にしむや野分袖のやどの袂とふ秋の夕暮 重經

朝臣

うき物と思はていさや心みん秋をなさけの夕くれの空 式部卿

宮

うき秋は草の戸のみか置露の玉のうてなもおなし夕へを

あやにくに忘れやらぬさひしさを心にかこつ秋の夕くれ

さひしさは我身ひとつの秋ならはいかに住へき宿の夕へそ

初鴈

いつしかと妻とふ声かちきり置て我こそ待し秋の鴈かね

秋風も夕暮さひし誰をかもたのむの鴈のよると鳴らん 式部卿

宮

いつくにか翅やすめて海山の道もさはらすかりはきぬらん 製

製

霧まよふ外山をこえてくる鴈の数はみえねと声はまちかき

日数ふるこし路の旅に幾度か翅やすめてかりのきぬらん

秋田

露なひく稲葉の雲や一通り秋かせみせて時雨行らん 仁和寺宮

おとろかす鳥にはあらて小山田やいなはの雲にさはく秋風

庵さす田面の稲葉かせ過て引ぬなるこや音に立らん

色こきはいつれか木のは大あらきの杜のうき田のかりしほの比

御製

守人の袂をかけて置露の稲葉の末に秋風そふく

夜鹿

人も又衾と聞やななき夜に独りある鹿の鳴あかす声

をのか妻たのめぬ夜のななきをも秋にかこちて鹿や鳴らん 親

王御方

そよ更に夜寒やわふるさ、のはのみ山おろしに鹿ぞ鳴なる 式

部卿宮

さをしかの小野の草ふし長夜の夢路やたのむ妻こひのこゑ

吹まよふ山の嵐の寒きよやたちと定す鹿の鳴らん

暁虫

蛭今いく夜をかうらみまし霜に成行有明のこゑ

昔おもふね覚の床に鳴よりて衾をつくすきりくすかな 御製

鳴虫の声も色ある草の戸の露よりしらむよこそおしけれ

秋寒き枕にちかききりくす我ね覚をも衾とはしれ

蛭をのかおもひもしら露の暁さむき秋のまくらに

山月

待程の心つくしも山高みこの間をいつる月にみえつ、

夕煙たつる麓のさと人は月いつるともしらぬわさかも

月影はちりもくもらて久かたのあま雲か、る山としもなし

親王御方

澄のはる影そさやけき峯高み月は麓の塵もくもらて

えそしらぬ何の山のすかたもか都に近きをはすての月

湖月

たくひなき影をならへてしかの浦や松にさはらぬ月のさやけさ

秋もまつ影は水てから崎や浪間の月にまつかせそふく

すはの海や月はさなから雪のよの氷らぬ波に秋かせそ吹 御製  
打ちいての濱かせすこく影更てさ、波なから月そかたふく

秋のよのなからの山に雲消てしかのからさき月そさやけき

野月

分る野、もすその露に影消て月の雪さへ跡はみえける 仁和寺  
宮

うつり行心千種の花かたみめならぬ野への露の月影

置あまる千種の一つゆのかきりをも光にみする野への月かな 親

王御方

秋の野、の花の千種の一つゆの上に光を分て月そやとれる

出入も山の端みえぬむさしのはあくるを月のかきりとやみん

渡月

家もあらは袞いく夜かくまもなきさの、渡りの月にあかさん

御製

あこかる、月を追手に出舟や淀のわたりも遠く過らん

月影も渡を遠み更るよに行末みえぬ淀のつきはし

うらかせはせとこす月に声更て秋物かなしむしあけの松

さし上る程やならん由良の戸の月のみ舟はかちをたへても

仁和寺宮

庭月

影さむき庭よりつもる月の雪をはらはぬ袖も秋かせそ吹 親王

御方

植置し庭の草木の面かけもさらにめかれぬ月のさやけさ 御製

契をく千とせの秋を雲の上にくめくりとか月は住らん

庭せはき草の籬の露の底にやとるや月も袞しるらん

ふりにける庭は浅茅か露の上におなし宿とふ月の影かな

関霧

関の戸は明るもしらす立籠て待人したふ霧のよふかき

すまの浦や浪路にはれてしはしなを霧吹残す関のあきかせ

逢坂やこえ行関路霧籠てしみつにあらぬ袖ぬらすらし

旅人のゆき、へたて、関の戸の明るもしらす霧のうちかな

荒垣のあらはに隙もみえぬまで秋霧かこふ川口のせき

聞持衣

たか里もよさむはおなし心とや思ひかはして衣うつらん

よそに聞音まで寒し秋かせに霜をかさねて衣うつ夜を

しつめかなすてふわさはしけ、れと衣うつ夜そよそにしら

る、御製

袞ともいは、や賤かあさ衣うつ声さそふかせのたよりに 親

王御方

まとをなる名には立てもあさ衣うつこゑ聞ぬ暁もなし 仁和寺

宮

重陽宴

さかつきに菊をうかへていくめくり秋をかさねんけふの例そ

今日毎の秋を契て盃の光そへたる菊のしらつゆ

長月のけふ九重にめぐりあふ秋も千とせのさくのさかつき

雲の上に千とせの秋もめぐりこんためしやけふの菊のさかつき

ことの葉にさくの盃さしそへて千世をめぐらす九重の秋

杜紅葉

をとろふる色とみるにもかなしきは名さへ老その杜の紅葉々



紅葉する色にめてつ、立とまる人はたれその杜のした道

いかにして露も時雨も染つらん名にはときはの杜のもみちは

下草の花もうつろふ大あらしの木の葉を色かはりゆく

〳〵幾度か生田の森の村時雨とふに木末の色まさるらん 式部卿宮

河紅葉

秋ふかみ散もちらぬも大る川影をみたせる波のもみちは

もみち葉の影をうつして立田川錦や波のあやを見すらん

〳〵立田川水の秋をやいそくらん峯の木のはに山かせそふく 式部

卿宮

枝なからうろふかけや山川の底に散しく秋の紅葉々

山川や水の心も行やらぬ岩かき紅葉誰かみるらん

九月盡

長月と名にのみ立て行秋のけふをかきりにくる、程なき

〳〵惜と思ふ心に秋のしたかは、たか情にかけふはとまらん 式部

卿宮

うしとても詠はすてし秋もはやけふの夕にかきる名残を

行秋の夕のかねも心して今日の日よなかき日もかな

〳〵けふのみとしたふに絶ぬ袖のつゆ消すは有とも秋はのこらし

御製

冬十首

初冬時雨

昨日はや秋をさそひて行雲の名残か今朝も又しくれぬる

名残あるきのふの秋の面影にあしたの雲や先しくるらん

あさもよひ昨日か暮し秋しの、外山しくれて冬はきにけり

定なき名にはたてとも神無月必とふるはつしくれかな

今朝は又冬のいろしく木枯やうき雲さそひ時雨きぬらん

落葉

梢吹あらしの声や庭の面の落葉か上になをのこるらん

〳〵朝な〳〵散しく紅葉吹よせて庭にそ高き木枯のこゑ 重経朝臣

木のはをはさそひつくして山陰の嵐や枝に遠さかるらん

降をける音しもかろくならのはのをのれ時雨し冬の本

〳〵山かせも心うつして紅葉々の色こきよりや先さそふらん 親王

御方

寒草

霜は猶をか草ねのとちてたにをのれそさやくさ、の一村

一本も花はのこらぬ冬草の霜のかれはもおしき色かな

〳〵枯わたる野邊の浅茅に置露や秋にはさかぬ花を見すらん 重経

朝臣

冬かる、のへにもさ、の一村やかして風の音のこすらん

朝な〳〵もと見し秋の色もなし霜のふる枝の庭の萩原

残雪

あさもよひ昨日の庭にをく霜の色をつけてもふれる雪かな

今朝はまた通路みせて降雪の友まつ程を人もとへかし

心あれやつかふる人の沓の跡もかくさぬ庭の今朝の初雪

今朝みれは風のさ、原そのま、に埋もはてぬのへの雪かな

た、ひとへふる初雪のむら消てとはぬに跡の見ゆる庭かな

積雪

〳〵下折を絶すもはらへうつもる、嵐も松の雪に籠りて 仁和寺宮

打なひく竹は其ま、下おれて雪にはれたる窓のうちかな

下折の音せぬ竹やよと、もにつもるま、なる雪をみすらん

降ま、に埋れはて、呉竹の千尋を雪の上に見るかな 式部卿宮  
降雪の積かさねて庭の面の籬も山に今やみゆらん

池氷

さ、波によるへ定めぬうき草のねさしと、めて水池かな  
池の面に日影のうつる程みえて氷そ水の下に成ぬる

かり残すこすけもけさは氷とちて嵐音なきまの、池水 御製  
あやうかる道をはしらて朝なく水をふめる池のをし鴨  
よをかさね氷るます田の池に住鳩のかよひ路絶やはつらん

豊明節会

いかにして天津乙女の姿をは豊の明に残しをきけん  
かしこしな今もむかしのおりにあふ豊の明の絶ぬためしは

けふといへは日かけのかつら打はへて豊のあかりに出る乙女子  
やまあひのをみの衣の竹のはも霜置そふる月のさやけさ  
更に今豊のあかりも乙女子か昔をかへす袖とみえつ、

冬月

さゆる夜はねられぬま、に床の上の霜もおきぬて月をみる哉  
ね覚して明る光と幾度か夜なかき冬の月をみつらん 御製  
有明の比にはあらて一とせの月の名残も冬のよの空

かせさそふ雪けの空の夜はの月くもるも影のさえわたりつ、  
さゆる夜の空もくもらて澄月の光を花と雪を散くる

湯千鳥

夕塩の干かたも遠き波かせの声にわかれて鳴千鳥哉  
塩ひかた真砂の千鳥貝ひるふ海邊をも友となれて鳴らし

月清み塩のひかたの真砂地に数さへ見えて立千鳥哉 式部卿宮

さよ千鳥友よひかはしきさ湯や苦やも近き波に鳴なり  
月影も暁かけて落塩のひかたの千鳥いまやなくらん

歳暮

徒に月日は雪と積り来てあつめぬ窓に年そくれぬる  
行年の名残にかへてなへて世の長閑なるへき春や待らん

冬枯の梢にうつる村鳥のとまるかけなくくる、年かな 御製  
春秋もかへらぬいまのなこりにてめつらしけなくくる、年かな  
仁和寺宮

積り行日数よいかにあかさりし春にはちかき年のくれかな

僻案愚点三十八首

実隆上

御製

秋九首 冬三首

親王御方

秋六首 冬一首

式部卿宮

秋六首 冬二首

仁和寺宮

秋五首 冬二首

重経朝臣

秋二首 冬二首

雑二十首

暁鳥

鳴鳥の八声の数も積り行老のね覚に誰か聞らん  
心あれやなかきねふりの暁をおとろかしぬる鳥の初音は

告渡る夕付鳥の一こゑに千さとをかけて明る空かな  
いつか身のまことの夢は覚てまし暁つくる鳥の八こゑも

さたまらぬね覚も人は有るものを衾時しる鳥のこゑ哉 御製  
夜燈

徒にかゝくる窓の灯やむかふもそむくこゝろなるらん  
さよ風の窓のすきまに吹入てしつかにもみぬ燈のかけ

法のため学とならば後のよの道もまよはし窓の燈火 御製  
晴かたき心のやみのなかきよを照すもけすや法のともしひ  
いつか扱か、けてもみん学ひえぬ我身にくらき灯のかけ

嶺松

／＼いつの世に生のほりけん種そともしら雲かゝる峯の松か枝 式

部卿宮

をしほ山峯なる松のふかみとり神代かはらぬ色やみすらん

／＼我やとに植てもみはや峯高みかせにかたふく松の老木を 御製

／＼いつの世の麓の塵を種として生のほりけん峯の松かえ 仁和寺

宮

嶺高みみとりの空に出る日も不変の松の上に見ゆらん

里竹

陰しけき軒端の竹のよはなかく暮るははやき里の一方た

／＼ふりにけん伏見の竹のそのなのみのこるかひなき里の一方 式

部卿宮

／＼をのつから煙は見えて一村の竹のかきは里としもなし 重經

朝臣

里人の世渡る道のうきふしもよそにしらるゝ竹の下かけ

打なひく麓の竹の青葉にもまかはぬ里の夕煙かな

磯巖

浦かせも荒磯かくれうつ波にひとりくたけぬ岩ほとそみる

うらかせのあらし磯辺に音はして高き岩をも波やこゆるらん

浦にすむ海士の衣のほのくやかよふ磯邊の岩ほなるらん

満塩に岩ほのこらすこす波の雫やしはし磯つたふらん

／＼波かゝる岩ほかくれの苦屋かた磯や摘らん海士やすむらん

仁和寺宮

嶋鶴

／＼手飼にもたれするならしかこの嶋立もはなれす田鶴ぞ鳴なり

御製

契りてや友に千とせを松嶋にむれある田鶴の声かはすらん

浪さはく興津嶋邊に立鶴のねふる心やひとり長閑けさ

をくろさきみつの小嶋の夕波に声そふたつも心あるらし

和歌の浦や塩風遠く曇日はゑしまにあさる鶴の声く

岡篠

岡野へやしけき小篠の冬(か)にたに分る人なき露のした道

松の葉のたくひにみえて露霜の岡邊の小さゝ冬枯もなし

冬かれはしらぬ岡邊の小篠原霜の降はもあをくみえけり

夕付日さゝぬくまもや冬枯に残る岡邊の小篠なるらん

／＼小篠原みとりそのころ露霜の岡の草葉は冬籠れとも 式部卿

宮

江葦

難波かた引塩遠き浦かせに入江のあしや猶さやくらん

かせさむみ猶枯たてる芦のはや入江の波に折かへるらん

萩のはになにかはかはる難波江や芦間をわたる風そよく也

浦かせの吹にまかせてなひきふす入江の芦や浪のうき草

これも又ほにそ出けるこす波の露の玉江のあしのむらく

浦船

／＼繫置うらはの舟の数々はあまのとまやをならふとそみる 御

製

漕出て浪間にきえし釣舟の又あらはる、浦のゆふ波  
舟とめて見てや過まし海士人もくまぬ名に立つしほつすかうら  
波た、ぬあさかの浦の朝なきに漕行舟や玉藻かるらん  
朝なぐをのか浦々漕出ていとまも波の海士の釣舟

山山

今も猶たえせぬわさをしからきや真木の柚人宮木引らし  
宮木にも直きをえらふかしこさはけにそま人の名をもくたさ  
し

山に入道とはみれと世間のうきにはこりぬ柚木ひくらし

柚人の入にし道もあらはれて山口しるき斧の音かな 式部卿宮  
宮木引柚山口やこ、ならんすくに見えたる道の一すし

岸苔

風寒み河なみかくる岸かけに枯す朽せすみゆる苔哉 御製  
咲て散花に絶えせぬ川岸の苔の緑にかゝるしらなみ  
住吉の岸におふなる草の名も忘るはかりに苔むしにけり  
これそけに時をも分ぬ川岸や波のうちよる苔の衣は  
河岸や苔のみたれてよる波にこと夢よりも露はかはらし

山家水

山のみを汲に心はならふなよ猶奥ふかくすまんと思に  
便なきこの山すみやかけひにもとらて小川の水結ふらん  
音高き滝たに有を山里はかけひの水も軒に落つ、  
朝夕に我影はかり友なひて結ふもさひし山のゐのみす

身はかくて住はてぬへき山里に水のなかれのいつち行らん 重  
経朝臣

山家嵐

塵の世の外なる物を山さとのあらしは何をまたはらふらん  
山かけのかせはいとはてのこれかし世のはけしさを身にはしみ  
ける

かこひてもやかてあれ行柴の庵や嵐のた、くとほそ成らん  
馴なはとしはしは思ふ山さとに猶き、捨ぬ嵐吹なり  
やつれ行たくひもかなしあさ衣柴の袖かきたへぬあらしに

田家雨

住すつる小田の庵の雨のよをよそに思ふもさひしかりけり 御  
製

刈てつむ稲葉の雲の下庵に晴すも秋の詠ふるころ

雨かゝる山田の稲のかり庵はかこひそへてももる雫かな 重  
朝臣

暮やすき秋の日影をしねほす賤かかりほの又時雨つ、 親王

御方

降雨の雫もさそな守捨し秋より後の小田の庵に

旅行

分初る都の野への朝ほらけいまた旅なる心こそせね 御製  
嶺高くのほりてみれば故郷もまた足もとに近き道かな  
雲を分露をしのきてけふいく日しらぬ野山に道いそくらん

いかならんけふの夕のとまりともしられぬ旅の道のはるけさ  
今日は猶都へたて、旅衣重なる山をこえそわひぬる

旅宿

枕かる野邊もなつかし前のよや我故郷の契り成らん  
いかにして夢は結はん草枕苔のむしろの露ふかきよに

故郷の袖とふ月に思ひやれおはなかりしき(欠字)ふすよを 式部卿宮

ふるさどにいつかへりけん我そともおとろく夢の草まくらかな 仁和寺宮

明るよをよそにしらせてさと遠き鳥の声する野へのかりふし

旅泊

よるもなをこきや出まし梶枕かた敷波のうちもねなくに

波の音にとてもねぬよを船人の泊をこゝと定めすもかな 御製

夢をさへいかて湊のとまり舟波の枕をそはたつるよは

舟とむるうきねの床の浦かせに夢をさそひてかへるなみかな

重經朝臣

末いそく舟出に待し追風もよるは夢路をよきてふかなん 親王御方

海眺望

御方

こと浦に出ればこれや難波舟それとみきは芦の一葉も

雪積る遠嶋まつやわたつ海の波より上のかさし成らん 式部卿宮

波の上も行末みえて満塩のひかたにちかき浦の遠嶋

松原はそれかと計数みえて波間にしつむ天のはしたて

はるくと浦より遠に立煙しほ焼あまの住家とぞみる

寄社祝

跡たれてすむより神も石清水うきなきよの影はしるしも

跡たれてその宮造あふくかな我君か代に住吉の神

直ほにも道をたゝすの神垣にへたてはあらし九重のうち

四方八すみおさまる道は隔なく千々の社の神ぞ守らん

諸人の祈るに付て男山さかゆく君か御代のかしこさ 重經朝臣

寄日祝

明けき世のためしとも諸人のあふけは高き日の御影かな 御製

此国の外にも知かめくる日の光にみえてくもりなき世は 親王御方

御方

照す日のめくみをしらぬためしこそ君かおさむる時にみえける

四方八すみくもりなき世と出る日の影をそあふく天のかく山

限なき君か千とせも久かたの空にしられてめくる日のかけ

僻案愚點二十七首

實隆上

御製

親王御方

三首

式部卿宮

六首

仁和寺宮

三首

重經朝臣

五首

(もとやま やえこ) 本学大学院博士課程後期課程